御柱尾根遺跡

－水環境整備事業溜池堤体漏水防止前は
がね土採取工事に係わる発掘調査報告書－

1998

長野県富士見町教育委員会

例　　言

1　本書は、水環境整備事業烏帽子地区の溜池堤体漏水防止前はがね土採取の工事に先立ち、諏訪地方事務所の委託をうけて富士見町教育委員会が実施した、御柱尾根遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査および整理作業は、平成９年７月31日から平成10年３月20日まで行われた。

3　発掘調査は樋口誠司・小松隆史が担当し、本書の執筆および実測図の作成は小松隆史が行った。

4　紙数の都合上遺構の実測図を優先し、写真および遺物の実測図は最小限にとどめた。

5　本報告にかかわる出土品、諸記録は井戸尻考古館が保管している。

6　調査中、出土した骨について、富士見高原病院院長井上憲昭氏ならびにＪＡ諏訪みどり畜産センター高西博文氏に鑑定していただいた。記して謝意を表するものである。

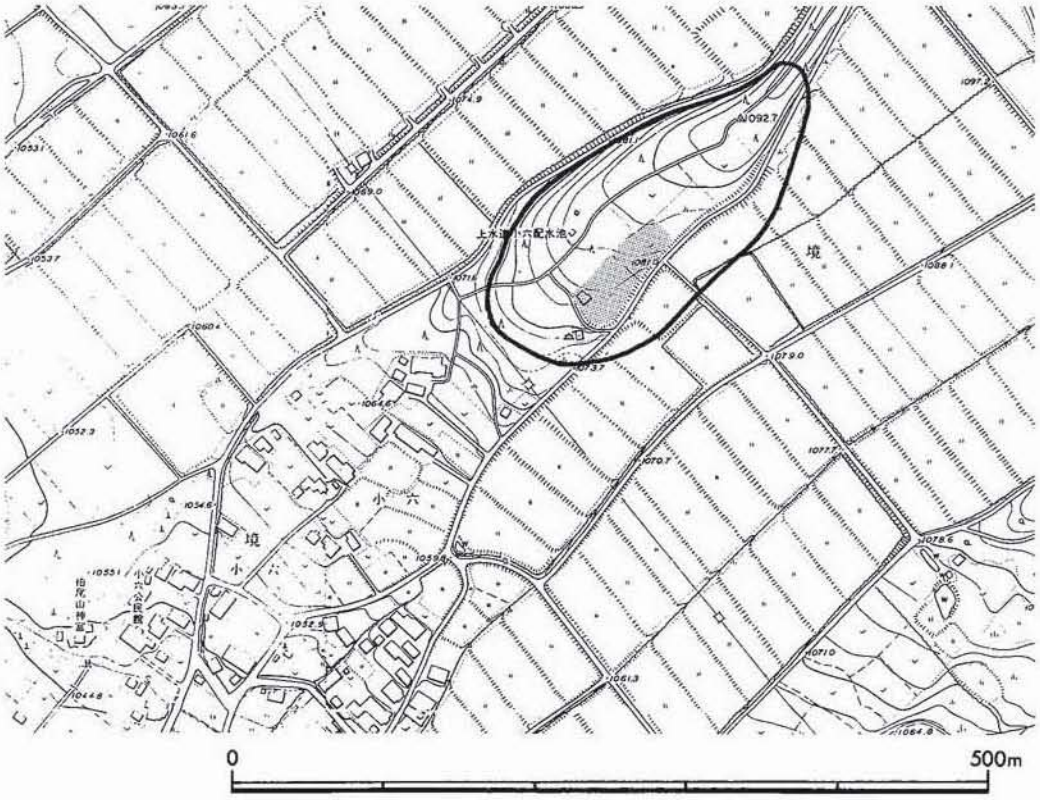
7　図６の馬の骨格図は、松井章　1989「動物遺存体からなにがわかるか」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』クバプロ　1995刊　p.120の図２をトレース後転載した。

1　遺跡の環境と調査の経緯

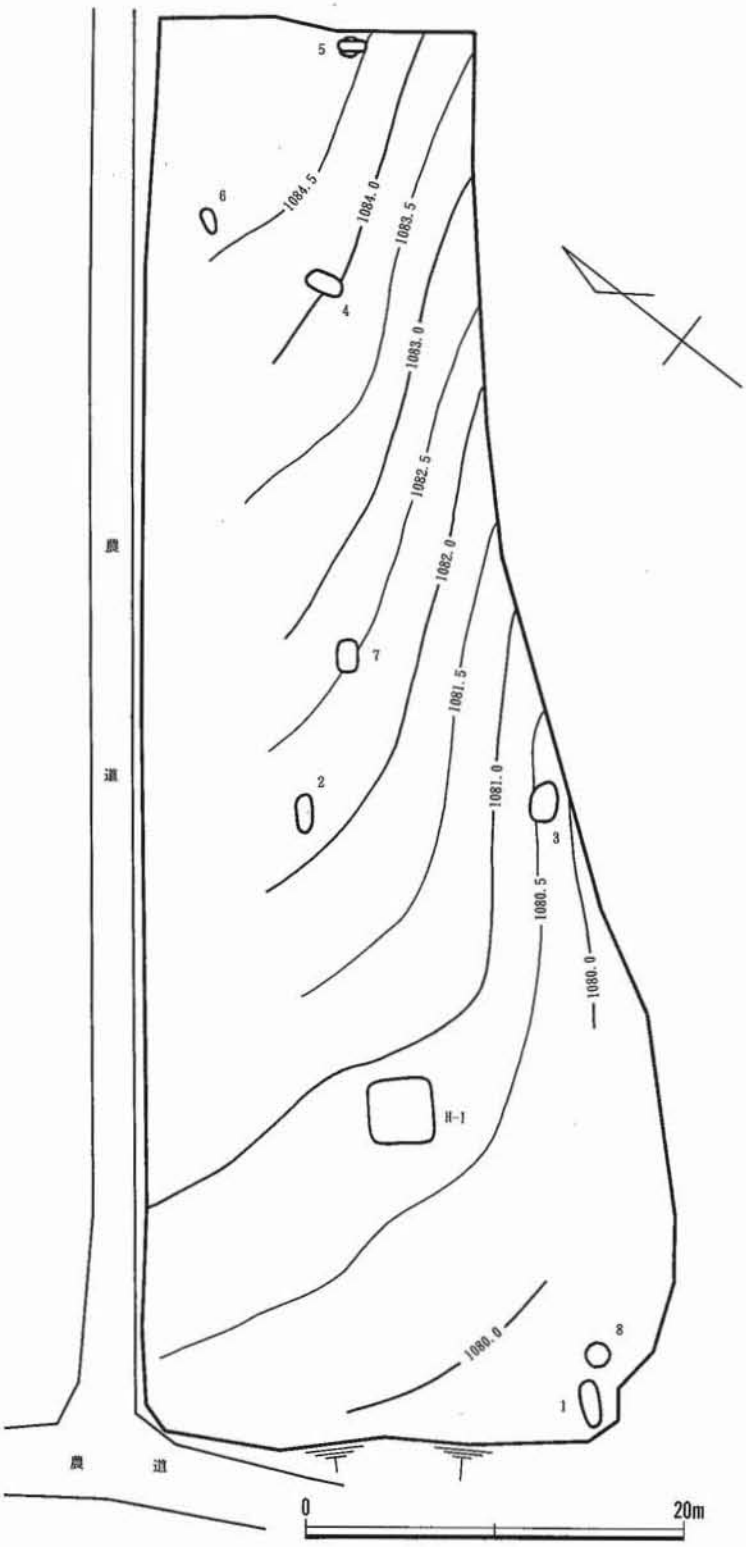
遺跡と環境　遺跡は小六集落の北、八ヶ岳から緩やかにのびる、通称御柱尾根にある。字は手白というが、この尾根の南西に鎮座する小六の氏神、柏尾社の御柱がこの尾根を曳行されることからこう呼ばれる。尾根幅は最大100mを測るが、過去の基盤整備事業で、東縁をかなり削られたらしい。

御柱尾根遺跡は以前から縄文中期と平安時代の遺物の出土する遺跡として知られており、かつては矢じりなどがたくさん拾えたとのことである。基盤整備事業で削られた南東向きの斜面にも、遺物がかなり見られたようである。

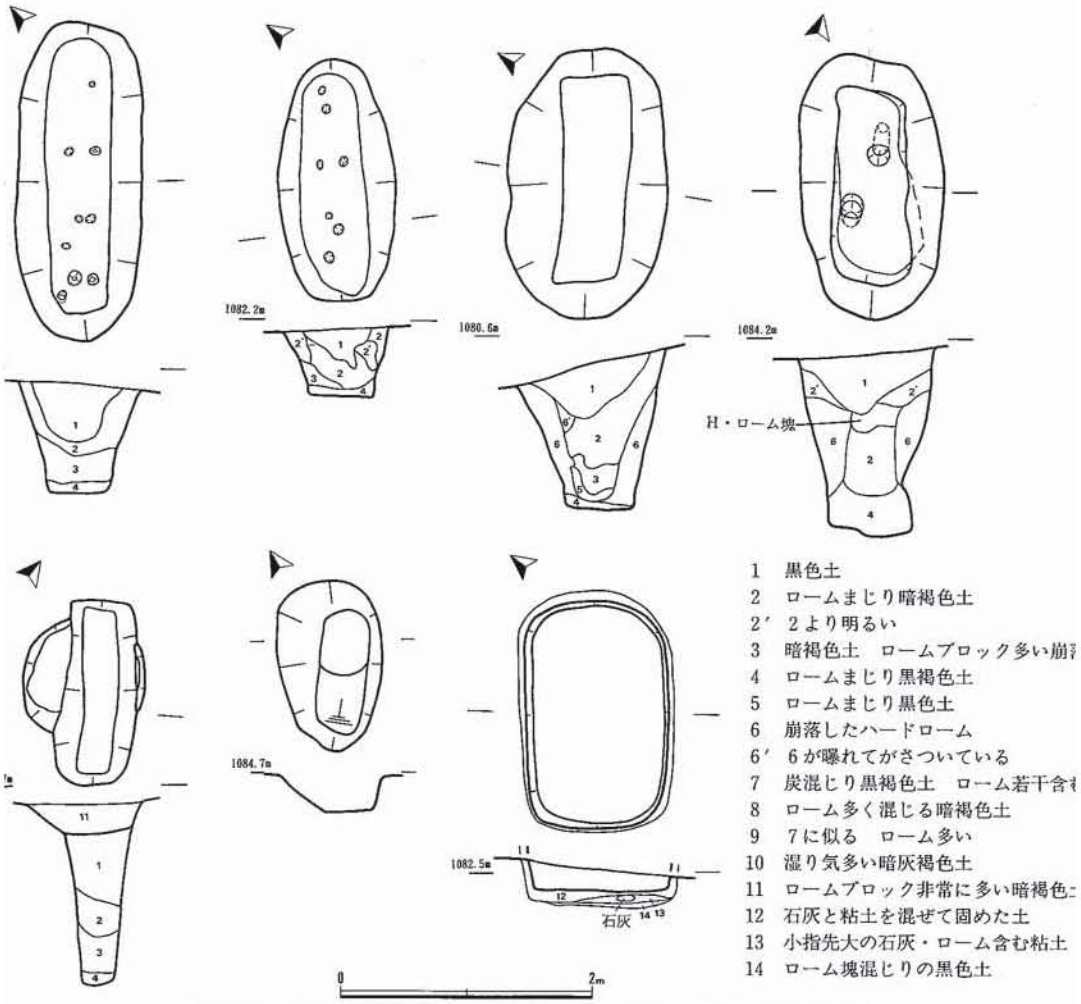
調査の経緯　調査の対象となった場所は尾根の末端に近い東南向きの緩斜面である。水環境整備事業烏帽子地区溜池堤体工事のはがね土の適当な採取地がこの場所以外に見つからなかったため、長野県教育委員会・諏訪地方事務所・富士見町教育委員会の三者で協議を行い、工事に先立ち発掘調査をすることとなった。



第１図　御柱尾根遺跡付近地形図（1：5,000）



第２図　調査区遺構配置全体図（1：400）



第3図　小竪穴（1：60）　上段左から1・2・3・4号　下段左から5・6・7号

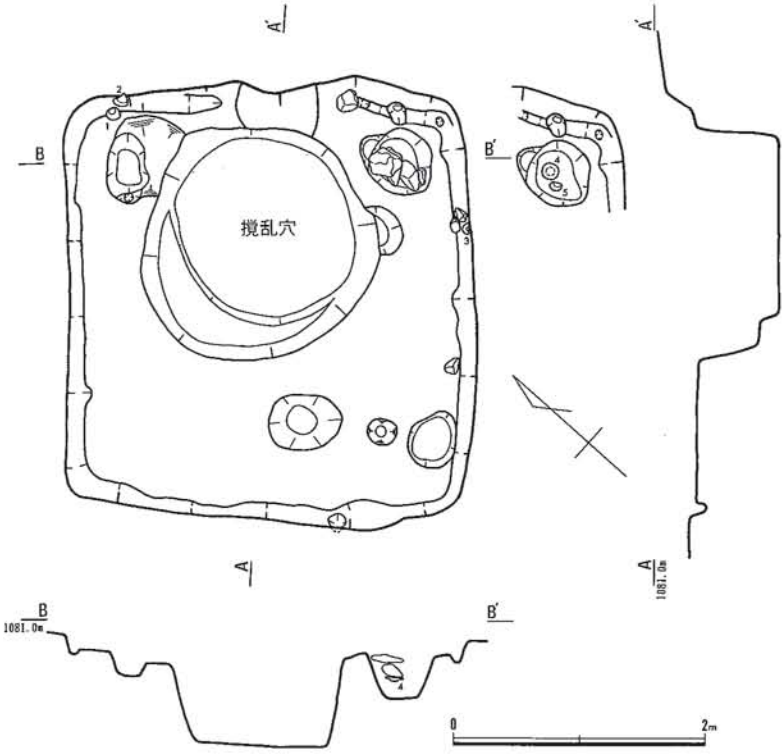
2　遺構と遺物

小　竪　穴

計8基が発見された。うち5基は縄文時代の陥し穴である。全体のプランは長楕円形または長方形で、底に小穴をもつもの（1・2号）、内側に傾斜した2本の杭跡をもつもの（4号）、無穴のもの（3・5号）に大別できる。1～3号は上部を削られており、実際はもう少し深かったことが推察される。5号は幅が狭く、ロームの崩落が見られない。埋没後に、浅い盥状の穴がその上部に掘られているが、この穴の時期は不明である。

6号は浅く、用途の不明な穴。7号は近・現代の肥溜穴で、下肥の漏洩を防ぐため、壁と底は、石灰と粘土を混ぜたもので塗り固められている。

8号については後述する。



第４図　Ｈ－１号住居址（1：60）

住　居　址

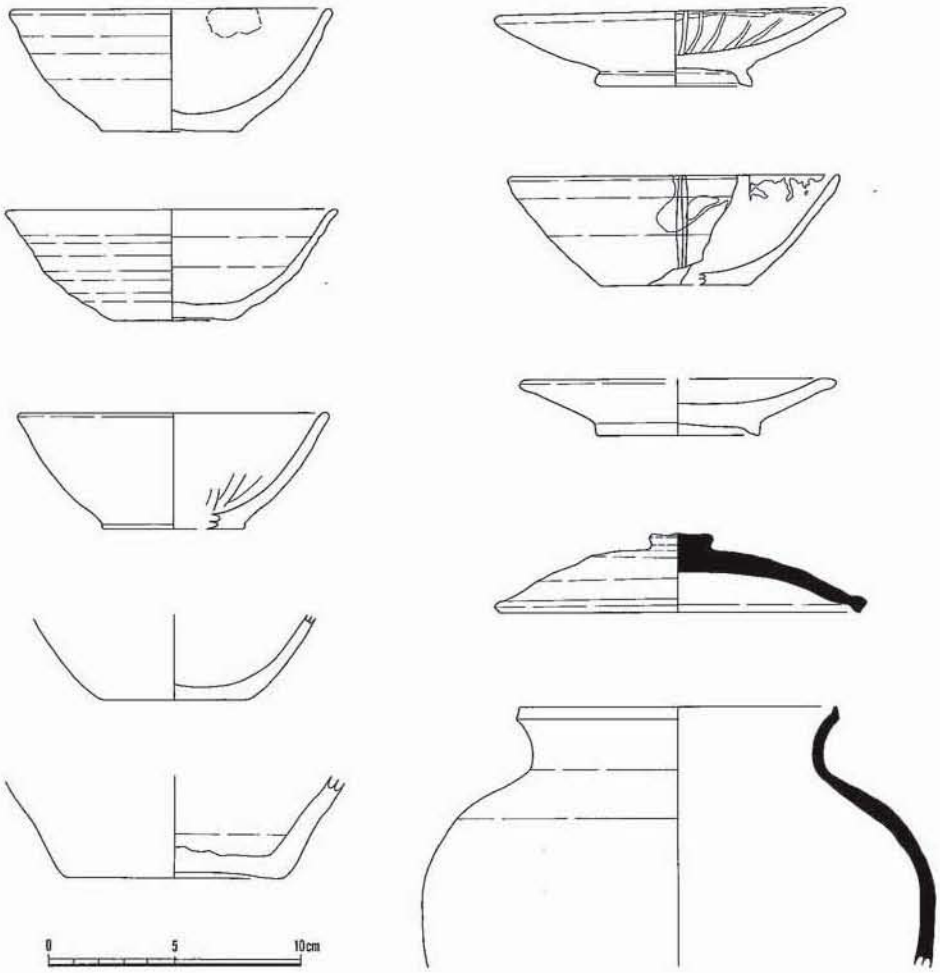
Ｈ－１号住居址

本住居址は調査区南寄りに位置する。バックホーにより表土を除去すると、方形の黒色土の落ち込みが現れ、土師器の小片が発見されたため、平安時代の住居址であると確認、Ｈ－１号住居址とした。

黒褐色土で埋まっていたが、竪穴中央やや北寄りに直径2m程の円形の撹乱穴があり、ロームのブロックを多量に含む黒色土で埋められていた。住居は一辺3m20cmほどで、上部は削られており、残存部は浅かった。

竈は、袖も火床面も残されておらず、熱により硬化したロームが検出されただけだった。撹乱穴が掘られたときに破壊されたと思われ、竈の袖石なども、住居址内には全く残されていなかった。周溝が全周確認できたが、柱穴ははっきりしない。

遺物は完形、もしくは完形に近い土師器の坏が数点と、須恵器の坏蓋などが出土した。特に竈南側の穴には礫が入っていたが、これを取り除くと完形の高台付き皿が見つかった。その他破片になってしまっているが、撹乱穴から出土した遺物も多い。

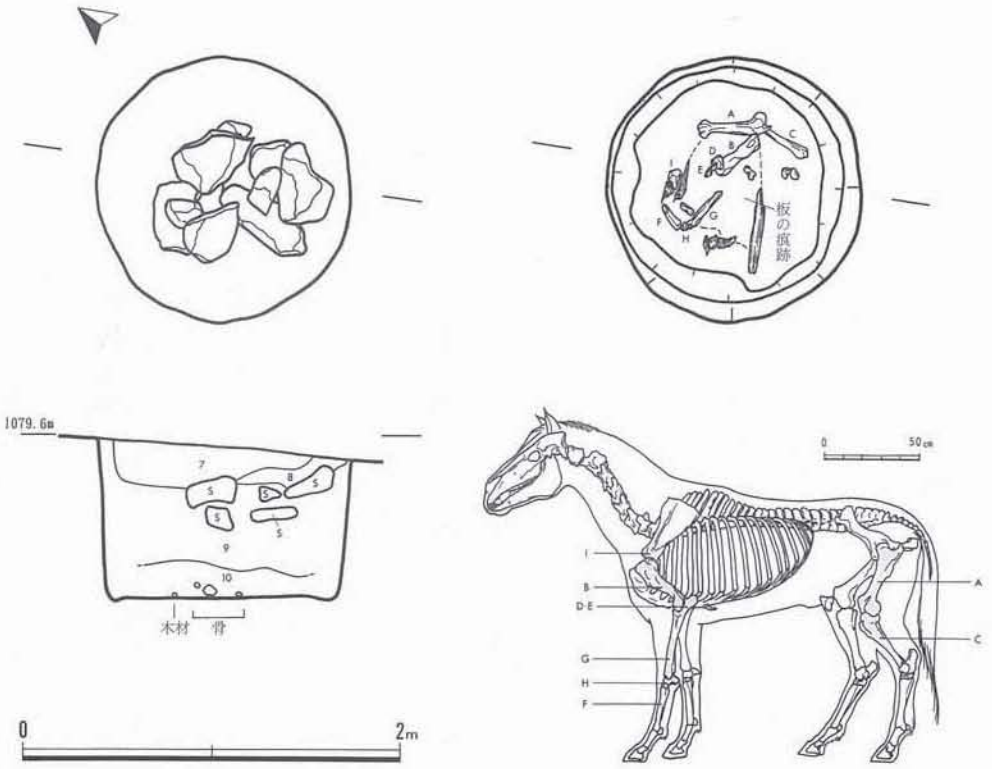


第５図　Ｈ－１号住居址出土遺物（1：3）

左列上から　1・2・3・7・9　　右列上から　4・5・6・8・10

本址出土の遺物は、土師器の坏・皿がほとんどで、破片を合わせて全部で17個体分が判別できた。灰釉陶器は発見されなかった。１～７は土師器の坏、または皿。１は内黒で、口唇部に漆のような黒色顔料が塗布された痕跡がある。２は内・外面に成形時のナデの痕跡が強く残る。３も内黒だがススの吸着不十分で灰色。ミガキ痕あり。４は内黒の高台皿。細いミガキ痕あり。高台は貼り付け高台。５は内黒で、燈芯油痕と油煙が這ったすすけの跡が見られる。３条の沈線が縦方向に施されているが、意味は不明。６は内黒の高台皿。７は内黒だがススの吸着不十分で、全体的にチョコレート色。ミガキは放射状に、右回りで密に施されている。８は須恵器の坏蓋。肩部にヘラケズリ痕。９は土師器甕の底部。底内側は螺旋状に中央が高い。10は須恵器甕の破片。肩部に一部、自然釉の膠着が見られる。

坏や皿の特徴から、10世紀第３四半期に属するものと考えられる。



第６図　８号小竪穴（1：40）　土層観察は p.7 に準ずる。

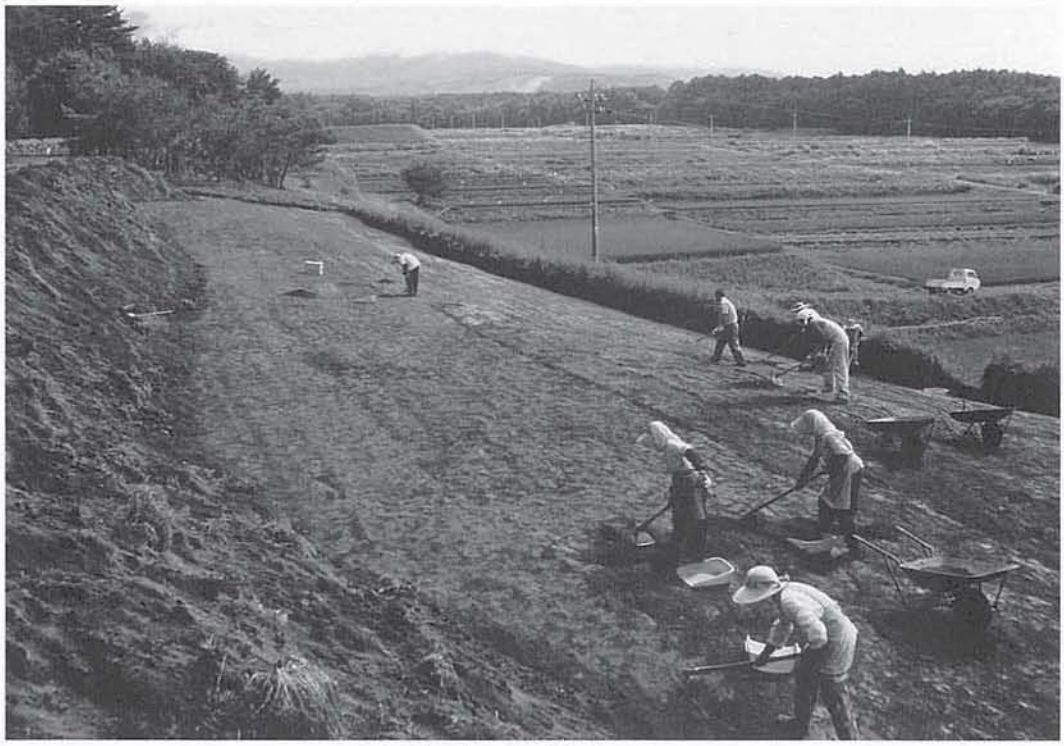
８号小竪穴

８号小竪穴は、調査区南隅に位置する。掌大～人の胴ほどの礫が計10個、折り重なるように確認され、底から大腿骨と思われる骨が出土したため、墓穴であることがわかった。当初は人骨かとも思われたが、その後の調査で、馬の骨であると判断された。穴は径130cm・深さ90cmの円形で、底には板の痕跡が見られ、周溝状のくぼみがめぐっていた。出土遺物は微小な染付磁器の破片と陶器小片１点、若干の木材がある。時期はこれらの染付などから近・現代のものだと推測できるが、この染付の小破片は摩滅が著しく特定できない。埋葬された馬の胃の中で消化されたものだろうか。

馬の骨は体の左半身の一部しか出土せず、骨格の中でも腐りにくいはずの歯や脊椎が全く認められなかった。これは埋葬時に頭部などがなかった可能性を示している。

一般にこの地方では馬が死ぬと“馬捨て場”という村の共有地に埋葬するのが通例で、近年まで、遺跡から東南へ1400mほど離れた林野がその場所であった。この墓穴の場合、“馬捨て場”ではない、村に近い尾根であるという点、桶に入れて丁寧に埋葬されたことが推測できること、体の一部しかなかった可能性などから特殊な例だといえる。

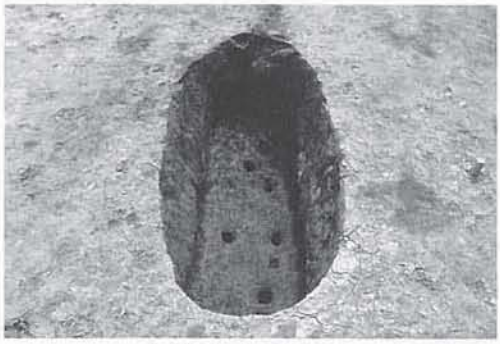
遺 跡 全 景（東より）



調 査 風 景（西より）

図　版　2

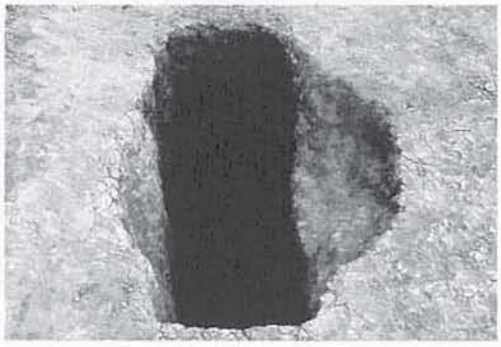
H－1号住居址（南西より）



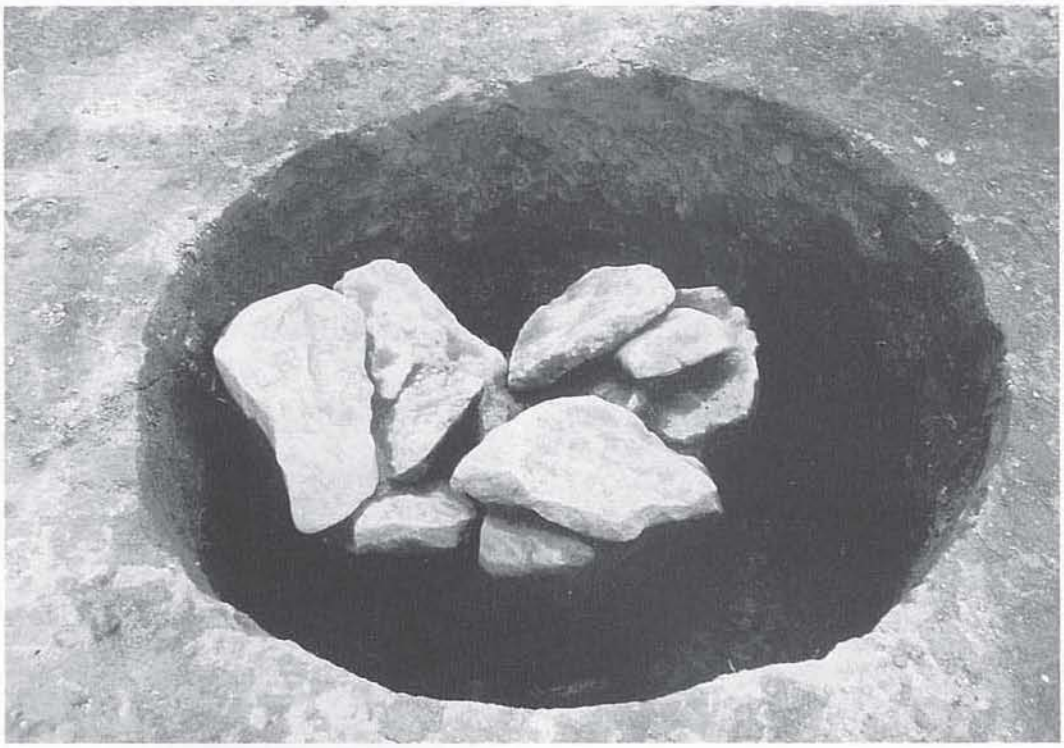
2号小竪穴（北東より）

3号小竪穴（北東より）

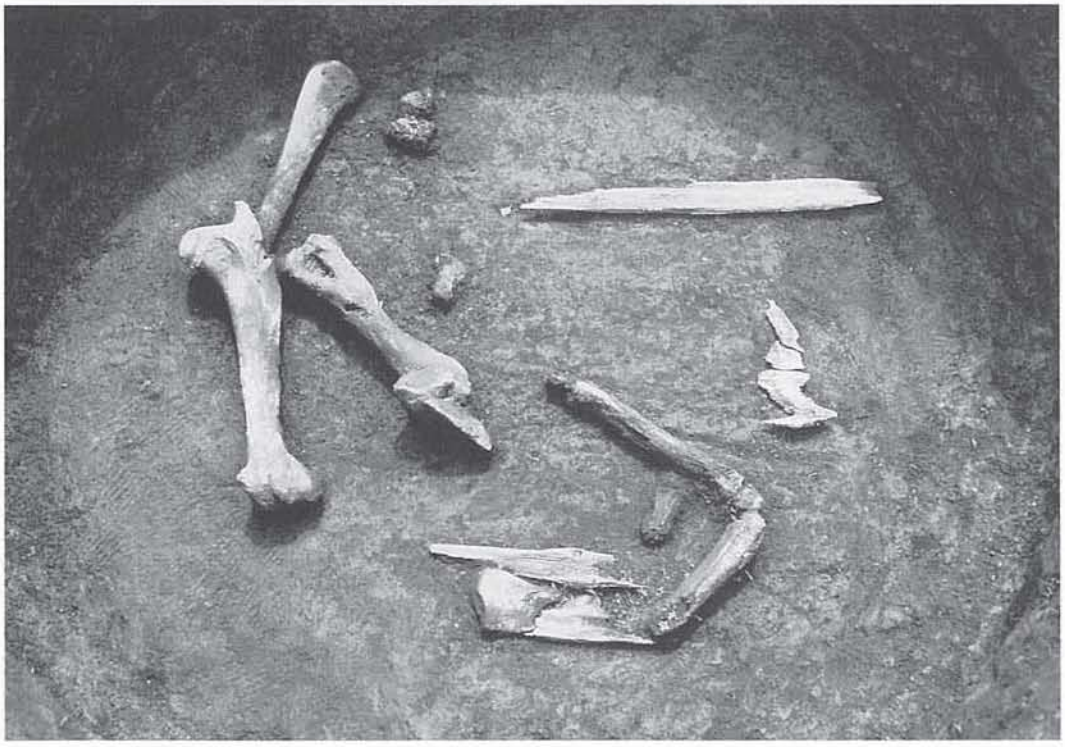
4号小竪穴（北より）



5号小竪穴（北西より）



8号小竪穴　石の出土状況（北東より）

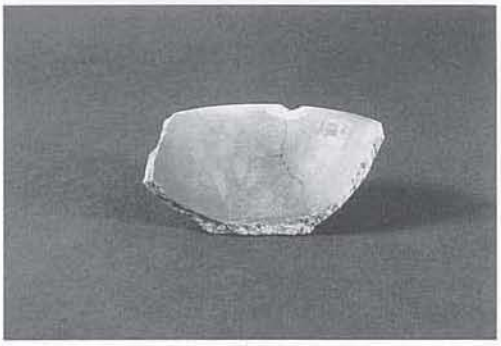


8号小竪穴　骨の出土状況（北西より）

図　版　4

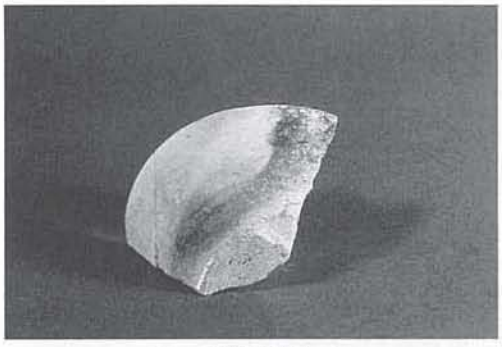
H－1号住居址　1

H－1号住居址　2



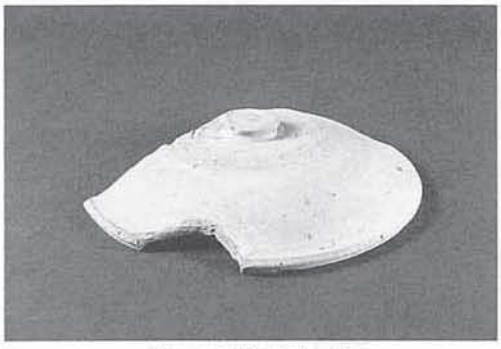
H－1号住居址　3

H－1号住居址　4

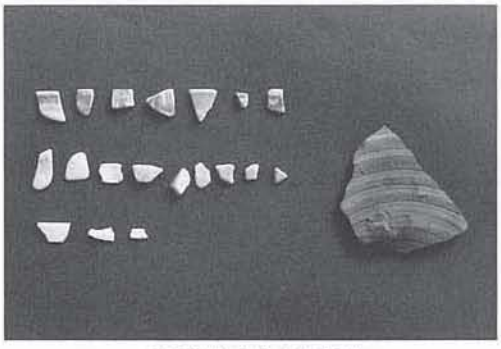


H－1号住居址　5

H－1号住居址　9



H－1号住居址　8



8号小竪穴出土陶磁器

御柱尾根遺跡

－水環境整備事業溜池堤体漏水
防止前はがね土採取工事
に係わる発掘調査報告書－

1998年３月

発　行　富士見町教育委員会

印　刷　もえぎ企画書籍
〒394-0043 岡谷市御倉町２-21
TEL 0266-22-4892